慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	黄庭堅の詩路(詩的論理)について
Sub Title	Huang Tingjian 黄庭堅 and his logical structure of poems (shilu 詩路)
Author	村越, 貴代美(Murakoshi, Kiyomi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.11 (2018.) ,p.1- 41
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20180331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

黄庭堅の詩路（詩的論理）について

村越貴代美

はじめに

「詩路」は、筆者の造語である。中国語に「思路」という言葉があり、「考えのみちすじ」をいう。詩（詞を含む）にも同じように、イメージをつないでゆく道筋があるのではないか。それを「詩路」と呼んでみたい。

黄庭堅（一〇四五～一一〇五、字は山谷）の詩は、難解であるとされる。豊かな学殖に支えられ、典故を多用し、理知的であるがその論理を追うのが難しい。

荒井健氏は『黄庭堅』[1]「解説」で、黄庭堅の詩は「主知的で終始一貫して冷静な作風にもかかわらず、……作風と矛盾した現象がしばしばあらわれる。それは文脈の断絶である」として例を挙げ、「文脈の上に大きな転換がありながら、それは両者の行間に隠されている」「考えぬかれた詩的論理のたていとに、博引傍証の引用から成る隠喩のよこいとをからませて織りあげられる絢爛豪華な蜀の錦にもたとえられようか」といった具合に分析し、「作

品内部で主導的位置を占める論理的文脈に従って、あくまで知的な理解が要求される。にもかかわらず、突如として別の文脈がそこに交錯し、読者の精神を混乱に落しいれるのである。だが、この困難を乗りこえてこそ、はじめてかれの作品を十全に吟読したといえよう」とする。

荒井健氏はさらに、「山谷の文学に対して〝難解〟を云云することを、これまで故意に避けて来たのだが、既述によって、その事実はすでに推察されよう。そもそも同時代に、すでに注釈が試みられているのは、かれおよび蘇東坡の詩集が最初なのである（唐代においては、このような例はなかった）。注釈書の序文には、山谷の古典主義的作風による、作品理解の困難が、口をそろえてのべられている。しかし、山谷の詩の難解性が、それのみによるものでないことは、もはや論ずる必要はあるまい」という。

倉田淳之助氏も『黄庭堅』[2]「解説」で、「彼の詩はその方法論のように、一語一語が来歴のある用語である。彼のいう精博な読書によって得られたものである。けれどもその博識と鍛錬は賞賛されながら、一方では難解の評を生み、時には晦渋となって幾つもの解釈が生ずることになる。『黄山谷詩集』内集の善き注として認められている任淵の注は、用語の出典調べと、いわゆる換骨奪胎の開明に終始したものである」という。

黄庭堅は「換骨奪胎」「点鉄成金」の詩論を確立し、後世、江西詩派の開祖とされた。

本稿で取り上げようとしている問題を考えるきっかけとなったのは、一つには、以前台湾を旅行した際に書店で見つけた仇小屏『古典詩詞時空設計美学』（文津出版社、二〇〇二年）である。詩詞の作品を具体的に分析しながら、時間と空間を中心に、作品がどのような構造になっているか論じたもので、とても刺激的な論考で、ずっと気になっていた。きっかけの二つめは、十数年ほど参加していた黄庭堅の読詩会である。任淵の『山谷詩集注』二十巻を、少しずつ読んで巻五まできた。そこで巻一から再読してみて、黄庭堅には黄庭堅の論理的な筋道があるのではない

か、何に注目すればその筋道をたどれるのか、ということを考えたのである。

荒井健氏は、黄庭堅の詩的論理をたていと、博引傍証の引用から成る隠喩をよこいとになぞらえたが、任淵の注を通して山谷詩を読んでいると、膨大な量の古典文献が経糸（たていと）として織機にはられており、緯糸（よこいと）をくくりつけた梭（ひ）が自在に飛び交って、精緻に布を織り上げていくイメージがあった。

縦糸にどのようなものがあるのか、すなわちどのような古典文献から発想や字句を得ていたのかは、以前、任淵の『山谷詩集注』巻一の引用文献を調べて、いささか明らかにできた。[3] 巻一だけで文献は百種を超え、詩人は六十名を超えていた。経書のほか、思想書・歴史書・農業など科学書・筆記小説・詩文・百科全書などが利用されており、仏典も多く、詩人では陶淵明・韓愈・杜甫・蘇軾がとくに多い。こうした古典文献は、黄庭堅だけでなく宋代知識人が共通して「読むべき」とされたものであろう。「いたずらに僻典（ほとんど人に知られていない典故）を用いては喜んでいたり、ましてや使用典故のなかに埋もれてしまうような詩人ではなかった」とは、荒井氏も指摘している。

本稿では、膨大な古典文献の中から、なぜその典故を用いたのか、荒井氏のいう「詩的論理」、それを「詩路」と名づけて、どのようにすれば「詩路」をたどっていけるのか、いくつか作品を分析して、考えたい。テキストは、劉尚栄校点『黄庭堅詩集注』（中華書局『中国古典文学基本叢書』、二〇〇三年）を使用する。

一、暗喩

任淵『山谷詩集注』巻一の冒頭の詩、「古詩二首上蘇子瞻（古詩二首　蘇子瞻に上（たてまつ）る）」を見てみよう。元豊元

年（一〇七八）、山谷三十四歳、北京国子監教授として北京（河北）大名府にいた時の作。当時、蘇軾は徐州（河南）太守で、黄庭堅は手紙に詩二首を添えて送り、蘇軾との交流が始まった。詩題注に「前篇梅以属東坡」「後詩松以属東坡、茯苓以属門下士之賢者、菟糸以自況」とある。二首の其一は、梅で東坡をなぞらえた。其二は、松を蘇軾になぞらえた。茯苓は門下の賢者たち、菟糸は自らをなぞらえた。荒井氏、倉田氏とも其一を選集に採る。

江梅有佳実、
託根桃李場。
桃李終不言、
朝露借恩光。
孤芳忌皎潔、
氷雪空自香。
古来和鼎実、
此物升廟廊。
歳月坐成晩、
煙雨青已黄。
得升桃李盤、
以遠初見嘗。
終然不可口、

江梅　佳実有り
根を桃李の場に託す
桃李　終に言わず
朝露　恩光を借す
孤芳にして皎潔に忌まる
氷雪に空しく自ら香し
古来　鼎実を和するには
此の物　廟廊に升ぐ
歳月　坐に晩ることを成す
煙雨に青かりしが已に黄なり
桃李の盤に升ることを得て
遠きを以て初めて嘗めらる
終然として口に可ならず

擲置官道傍。　　官道の傍（かたわ）らに擲置せらる
但使本根在、　　但だ本根をして在らしめば
棄捐果何傷。　　棄捐せらるるとも果して何ぞ傷むあらん

（荒井訳）南方・揚子江のほとりの梅に立派な実ができて、北方の桃やスモモの果樹園に植樹された。桃やスモモは終始おし黙っていたが、かの樹には朝露が恵み深い日光を借りて輝いた。ひとり咲く花はそのまばゆいばかりの潔白さを嫌われて、氷か雪ほどの白さがただひたすら香るばかり。古来かなえのなかのごちそうに味つけするために、この梅は表座敷にも出されて来た。年はいつのまにか深まって行った。ぬか雨のなか、その実の青さは黄に色づいた。桃やスモモを盛った皿の中に入れられることができて、遠来のゆえにちょいとつまんでもらえはした、が、終にお口に合わず、大道のかたわらに捨て置かれた。ただもとの根が健在でありさえすれば、遺棄されたとて果して何を傷心することがあろう。

（倉田訳）江辺の梅は良い実がなるが、その梅が桃や李の園に植えられた。桃李は梅と仲良くはしないが、天の恵みの露は注がれる。梅の白い美しさがそねまれて、清らかな花は空しく香を放っている。昔から鼎のあつものの味を調えるものとして、この梅の実は宮中に入る。いつの間にか時が経って、梅雨に青い実は黄色に熟する。桃李と共に器に盛られることが出来て、遠方の珍しいものとして味われたが、結局は口に合わないとして遠い国道の傍に棄てられた。しかし根本さえしっかりしておれば、棄てられても少しも悲しむことはない。

倉田氏はまた、「この詩は東坡が嘉祐中に蜀から都に出て、秀才だという高い評判があり、首尾よく試験に合格して宮仕えするようになって、英宗は特に任用しようとされたが、王安石と政見を異にし、地方官になったことを、梅に託して慰めたものである」とする。

「江梅」は蘇軾のこと。「桃李」は朝廷の人々。「朝露」は天子の恩沢。梅の実が朝廷にあげられるのは、その酸味で鼎のあつものの味を調えるからである。「官道」は国道。そこに棄てられたとは、地方へ出されたことを言う。任淵は典故や用例を詳細に挙げ、荒井氏と倉田氏も解釈の参考にしている。

任淵は全巻冒頭の詩句（江梅有佳実、託根桃李場）の注の中で、「前記」のようなことを述べている。

山谷詩律妙一世、用意高遠、未易窺測。然置字下語、皆有所従来。孫莘老云、老杜詩無両字無来歴。劉夢得論詩亦言、無来歴字、前輩未嘗用。山谷屢拈此語、蓋亦以自表見也。第恨浅聞、未能尽知其源委。姑随所見、箋於其下、庶幾因指以識月。象外之意、学者当自得之。

山谷の詩律は一世に冠たるもので、意を用いること高遠であり、推察することは難しい。言葉の使い方にはすべて由来がある。孫莘老（孫覚『野客叢書』巻一九）は「老杜の詩には二字として来歴の無いものはない」といい、劉夢得（劉禹錫）も「来歴のない字を前輩は使ったことがない」と言った。山谷はしばしばこの言葉を取りあげた。おそらく自認することがあったのだろう。恨むらくは浅学にして、いまだその奥底をすべて知ることが出来ないことである。しばらく管見の及ぶ限りを注記し、月を指し示したい。言外の意は、学ぶ者が自ら得られんことを願う。

字句の典故・用例は、詩の解釈に関係するものである。たとえば「託根桃李場」について、『文選』巻四三、趙至「与嵇茂斉書」の「北土之性、難以託根（北方は寒冷なので、その土地に蘭や桂などを根づかせるのは難しい）」を引く。「江梅」が移植された「桃李場」が寒冷の土地で、根づくことが難しいことを言う。それは結句の「但使本根在、棄捐果何傷」と呼応するであろう。棄てられたのが「官道傍」であっても、そこに根をしっかり下ろしておればよい。任淵は「但使本根在、棄捐果何傷」の注として、まず「君子之於世、視其所立何如、不在遇不遇也（君子は世にあっては、立てている志がどうかを見るのである。恵まれているか不遇であるかは関係がない）」と自らの見解を述べている。

詩の全体を解釈するに当たって、「時空設計美学」理論にならい、時間と空間について考えてみる。

時間は、冬から春・夏へと推移している。空間は、江から宮中、それから官道へと移動している。それを示すアイテムが、桃李と梅である。

どちらも植物であるが、詩語として伝統的に付加されてきたイメージがある。それは単一ではなく、桃李は黄庭堅の名句として有名な「寄黄幾復」（『山谷詩集注』巻二）の「桃李春風一杯酒、江湖夜雨十年灯（桃李 春風 一杯の酒、江湖 夜雨 十年の灯）」など、春の暖かい風を受けて紅い花を咲かせる柔らかくなごやかなイメージもある。「古詩二首上蘇子瞻」では桃李は「不言（ものいわず）」、任淵は『漢書』巻五四「李広伝」の贊「桃李不言、下自成蹊（桃李 言わず、下 自ら蹊を成す）」を引き、「此借用、言江梅為桃李所忌（ここは借用し、江梅が桃李に忌み嫌われていることを言う）」とする。内容を措いて文字だけを借りたというのであるが、桃李が黙っているのは、紅い花の華やかさ、実の甘さによって、自然と人が樹の下に集まってくるからである。この典故を黄庭堅は好み、「柳閎展如蘇子瞻甥也其才徳甚美有意於学故以桃李不言下自成蹊八字作詩贈之（柳閎展如は蘇子瞻の甥なり 其の才

徳甚だ美くして学に意有り 故に「桃李不言下自成蹊」八字を以て詩を作って之に贈る)」(『山谷詩集注』巻五)も作っている。

片や梅は、「孤芳」である。「孤芳忌皎潔、氷雪空自香」について任淵は、韓愈「孟生詩」の「異質忌処群、孤芳難寄林(異質 群に処することを忌み、孤芳 林に寄せ難し)」、顔延之「祭屈原文」(『文選』巻六〇)の「物忌堅芳、人諱明絜(物は堅芳を忌み、人は明潔を諱む)」、鮑照「学劉公幹体」(『文選』巻三一)の「艶陽桃李節、皎絜不成妍(艶陽の桃李の節、皎潔として妍を成さず)」、陳・蘇子卿「梅花落」(『楽府詩集』巻二四)の「只言花是雪、不悟有香来(只だ言う 花は是れ雪と、香有りて来たるを悟らず)」を引く。これを承けて荒井氏は「孤芳は、孤立して開く(梅の)花。皎潔は光り輝く白さ」と注し、倉田氏は「皎潔 白く清らかなこと」と注する。

梅が白く清らかな花をつけると、なぜ桃李にねたまれるのか。「題灣峰閣」(『山谷詩集注』巻一)に、「梅蕭破顔氷雪、緑叢不見黄柑(梅蕭 氷雪に破顔し、緑叢 黄柑を見ず)」とある。梅の花は氷雪の中でほころんだ、緑の草むらに黄柑はまだ見えない、という意味で、冬の末から春初めの景色である。任淵が注したように、桃李が絢爛に咲く中、梅は「妍を成さず」、白くひっそりと妍を争わない。しかし咲く時期もまた異なり、桃李がまだ蕾を固く鎖すころ、梅だけが「氷雪」の厳しい寒さの中で香るのである。この「氷雪」は、宮中に移植されてからは「朝露」となり、「煙雨」の中、梅の青い実は黄色に熟した。季節は春から夏になり、梅の実は桃李の実と一緒に「氷盤」に盛られた。任淵は「得升桃李盤」の注に、韓愈「李花二首」其一「氷盤夏薦碧実脆(氷盤 夏は碧実の脆きを薦めん)」を引く。「氷雪」から「氷盤」へと、これもイメージがつながっている。

紅い桃李の花、白い梅の花、甘い桃李の実、酸っぱい梅の実。梅の実は、青から黄色へ熟す。色彩と味覚が対になりながら、時間軸にそって変化する。

「古詩二首上蘇子瞻」其二を見てみよう。

青松出澗壑、　青松　澗壑に出づ
十里聞風声。　十里　風声を聞く
上有百尺糸、　上に百尺の糸有り
下有千歳苓。　下に千歳の苓有り
自性得久要、　自性　久要を得たり
為人制頽齢。　人の為に頽齢を制す
小草有遠志、　小草　遠志有り
相依在平生。　相い依ること平生に在り
医和不並世、　医和（いか）　世を並べざるも
深根且固蔕。　根を深くし且つ蔕を固くす
人言可医国、　人は言う　国を医（いや）すべしと
何用太早計。　何ぞ用いん　太だ早計なることを
小大材則殊、　小大の材は則ち殊なれども
気味固相似。　気味は固（まこと）に相い似たり

（通釈）青く茂った松が山の谷間に生え、十里の遠くまで松籟が聞こえる。樹の上には百尺もの根なし葛（かずら）がか

らみ、下には千年物の茯苓が生えている。その本性として、長く服用すれば、老い衰えることを制して、人のためになる。薬草の小草・遠志は、いつもそばにある。名医医和と同じ時代には生まれあわせなかったが、深く根をはり、蔕もしっかり結んでいるのだ。みんなは言う、国を治すべきであると。どうして結論を急ぐのか。材の大小は異なるが、滋味や匂いはとてもよく似ている。

松はもちろん、冬の寒さの中、ほかの植物の葉が枯れ落ちる中で、青々と残る樹である。『論語』子罕篇に「歳寒然後知松柏之後凋（歳寒くして然る後に松柏の凋むに後ることを知る）」とある。「青松出澗壑、十里聞風声」について任淵は、「詩意謂東坡以大材而沈下僚、其蓋世之名則不可掩也（詩意は、東坡は大材でありながら低い官にとどまっているが、世に突出した才能は覆い隠すことはできないことである）」とする。

続く「上有百尺糸、下有千歳苓」は唐突な感じがするが、其一「江梅有佳実、託根桃李場」の注に任淵は「文選古詩云、冉冉孤生竹、結根太山阿。此句倣其体（『文選』巻二九「古詩十九首」其八に「冉冉たる孤生の竹、根を太山の阿に結ぶ」とある。この句はその体にならった）」という。「古詩十九首」其八は、次のような詩である。

冉冉孤生竹、結根泰山阿。
与君為新婚、菟糸附女蘿。
菟糸生有時、夫婦会有宜。
千里遠結婚、悠悠隔山陂。
思君令人老、軒車来何遅。

冉冉たる孤生の竹　根を泰山の阿に結ぶ
君と新婚を為すは　菟糸の女蘿に附くなり
菟糸　生ずるに時あり　夫婦　会するに宜あり
千里　遠く婚を結び　悠悠　山陂を隔つ
君を思えば人をして老いしむ　軒車　来ること何ぞ遅き

傷彼蕙蘭花、含英揚光輝。　傷む　彼の蕙蘭の花　英を含みて光輝を揚ぎ
過時而不采、将随秋草萎。　時を過ぎて采らずんば　将に秋草の萎むに随わんとするを
君亮執高節、賤妾亦何為。　君　亮（まこと）に高節を執らば　賤妾　亦た何をか為さん

（通釈）なよなよと伸びる一本の竹、その根を泰山のふもとに結んでいる。それにも似た私があなたと結婚することになったのは、菟糸（根なし葛）が女蘿（ひかげの蔓）にまとわりつくようなものでした。……（以下略）

この詩は、男と婚約して早く結ばれたいと思うのに、なかなかその願いがかなわず、悶々と時を過ごす女の気持ちを歌ったものである。竹も松と同様に、厳寒の冬にも葉を落とさず青々としている上、曲がらずまっすぐな性質を持っている。しかし黄庭堅のイメージは、「菟糸」と「女蘿」から医薬のほうへと飛ぶ。

松の樹にまつわりつく菟糸（根なし葛）や茯苓は、薬草で長く服用すると人のためになる。「小草有遠志」に任淵は、「世説、桓温問謝安、遠志又名小草、何以一物而有二名。郝隆曰、処則為遠志、出則為小草。此特借用、以指菟糸、言其不依附凡木、所志遠矣（『世説新語』排調篇に「桓温が謝安に、遠志を別名小草というが、同じ物になぜ二つ名前があるのだろうと尋ねた。郝隆が、うちにある時は遠志といい、世に出れば小草というのですと答えた」とある。ここは借用しているだけで菟糸を指し、それが平凡な樹に依っているのではなく志が遠大であることを言う）」と注するが、少し省略があって分かりづらい。「遠志」も薬草で、別名を「小草」という。本来は根を遠志、葉がのびると小草といった。隠棲を願っていた謝安に何度も出仕の命令がきて、桓温の司馬となった。あると

き桓温が薬草をもらい、遠志と小草の名前について謝安に尋ねると、そばにいた郝隆が答えた。謝安は恥ずかしそうにし、桓温はその様子を見ながら「悪くない答えだ、ぴったりだ」と笑った故事。任淵が指摘するように、「遠大な志」をかけたものであろう。

薬草から医和（いか）という古代の名医が出てきて、「人を癒すより国を癒すべきではないか」と話が展開する。[4] しかし松は「澗壑」に生えている。これを切り出して都へ持って行くのはたいへんなのである。「秋思寄子由」（『山谷詩集注』巻一）に、「老松閲世臥雲壑、挽著滄江無万牛（老松 世を閲（けみ）して 雲壑に臥す、滄江に挽著するに万牛無し）」、松の老木は世を経て、雲のかかる谷に横たわるように生えている、青々とした大江に引いてゆきたいが、運ぶ万頭もの牛はいないだろう、という句がある。だから「何用太早計（あわてないで欲しい）」というのである。其二にも「深根且固蔕」と「根」が登場して、其一からイメージはつながっている。

其二の時間は一定、空間も一定である。「医和」によって、古代から不変の「国を医す」という志が述べられる。場所は、其一の「朝」に対して、其二は「野」である。

典故・用例について理解したところで、解釈し直すと、暗喩にこめられた意味は次のようになるであろう。

（其一）蘇軾にはすぐれた才能があり、官界に登場した。人々には無視されたが、天子に目をかけられた。高潔さはねたまれて、厳しい状況でひとり奮闘した。昔から朝廷に、こうした人物は必要である。時がたち、活躍するようになった。人々と一緒に政事に参画し、天子に認められることもあった。だが時勢にあわずに、中央から遂われることになった。しかし志をしっかり持っていれば、まったく悲嘆することはない。

（其二）地方にあって蘇軾は、名声を響かせている。その周りには私をはじめ、慕う人々がたくさんいる。仕事

をすれば、きっと役に立つ。小さな存在だが遠大な志を持ち、平生の自分の言葉を忘れずに実行している。うまく用いてくれる人に出会っていないが、しっかり学問に励んでいる。国のために働きなさいと言われるが、結論を急がないでください。人材としてはそれぞれですが、いずれも有能な者たちです。

二、イメージの飛躍、言葉遊び

黄庭堅の詩について、倉田氏は次のように言う。(5)

宋詩の代表蘇黄の作品に、唐詩に見るような自然描写がないということは注意される一つである。劉宋の謝霊運あたりから発展して来た自然憧憬の心は、唐に入っては益々濃く、叙景の詩或は句が多く、唐詩では景と情を対立せしめて写すのを定形とした。恰も山水画が唐に発達し、山水中に人間を配して、自然と人間との融合・平和を現すのとその軌を一つにするところがあった。……（山谷の）表現は人を中心にし人事に随伴せしめるように傾き、自然描写には冷淡である。換言すれば心に受取る自然で、眼に映ずる自然を現すのではない。人事を、思想を、理知的に現そうとする傾向の強い詩として当然の帰結であろう。

なるほど、唐詩が山水画であるとするならば、山谷の詩は文人画のようである。自然そのままを写実的に描写するのではなく、付託されたイメージを緻密な計算のもとに配置していくようである。

自然の風物を詠んでいるようで、実は人、人事を詠んでいる例を、見てみよう。さきほどの桃李つながりで、ま

ず「戯詠蠟梅二首（戯れに蠟梅を詠む二首）」（『山谷詩集注』巻五）である。吉川幸次郎『宋詩概説』[6]に、

要するに黄庭堅は、同時の諸君のうち、もっとも芸術家であった。彼の詩は、遠縁の大おじにあたる梅堯臣とおなじく、日常の生活に密着するが、日常の中にある小さな波動が、人生に対してもつ意義を、彼はおそらく大おじよりも深く知っていた。そうしてそれを芸術に造詣しようとした。梅堯臣が「蝨」を詩にしたのは、おれがはじめてであるというように、彼にも、はじめて詩材としてとりあげたものがある。それが蠟で作った造花かと思われる巧緻な花、蠟梅であり、また白礬花とよぶ小さな白い花の木であったのは、象徴的である。

として、二首連作の其一を挙げている。

金蕾鎖春寒、　　金の蕾（つぼみ）　春寒に鎖ざし
悩人香未展。　　人を悩ます　香　未だ展びず
雖無桃李顔、　　桃李の顔（かんばせ）無しと雖も
風味極不浅。　　風味は極めて浅からず

この「不浅」に任淵は、「晋書、庾亮曰、老子於此処、興復不浅（『晋書』に「庾亮が『私はここでも興は浅くない』と言った」とある）」と、注している。『晋書』巻七三「庾亮伝」に「亮在武昌、諸佐吏殷浩之徒、乗秋夜往共登南楼、俄而不覚亮至、諸人将起避之。亮徐曰、諸君少住、老子於此処興復不浅。便拠胡床与浩等談詠竟坐。其坦

率行己、多此類也（庾亮が武昌にいた頃、佐吏の殷浩らが秋夜に連れ立って南楼に登り、ふと庾亮が来たのに気づき、立って席を譲ろうとしたら、庾亮はゆっくりと『諸君はどうぞそのまま。私はここでもなかなか楽しい』と言った。そうして床几に腰かけて、殷浩らと坐が終わるまで談笑した）」とあり、『世説新語』容止篇にも同様のエピソードが載せられている。

これを踏まえると、「不浅」は「興は浅くない」という意味になり、かつ数人で遊興していた時の言葉である。おそらく黄庭堅も、数人で連れ立って蠟梅を見に行っている。それは詩題注に、

山谷書此詩後云、京洛間有一種花、香気似梅花、五出而不能晶明、類女功撚蠟所成。京洛人因謂蠟梅。木身与葉乃類蒴藋。賓高州家有灌叢、能香一園也。王立之詩話云、蠟梅、山谷初見之、戯作二絶、縁此盛於京師。

山谷はこの詩の後に次のように書いた。「都に一種の花があり、香りは梅に似ていて、花は五弁、にぶく暗い色で、女工が蠟をこねて作ったようである。そのため都の人々は蠟梅と呼んでいる。木のようすと葉は蒴藋（くすぞ）に似ている。賓高州の家に茂みがあり、園いっぱいに香っている」と。王立之の詩話（『王直方詩話』、散佚）に、「蠟梅は、山谷が初めてこれを見て戯れに絶句二首を作り、そこで都に広まった」とある。

とあることから、推察できる。王直方（一〇六九～一一〇九）、字は立之、号は帰叟。中書舎人王棫の子、家には蔵書がたくさんあり、黄庭堅にその文を愛された。元祐年間（一〇八六～一〇九四）に、蘇軾・黄庭堅及び門下の人々と雅集をおこない、有名になった。『墨荘漫録』巻九に「家多侍児、而小鬟素児妍麗。王嘗以蠟梅花送晁無咎、無咎以詩五絶謝之、有言芳菲意浅婆容浅、憶得素児如此花（家には侍童がたくさんいたが、小女の素児が美しかっ

た。王直方はかつて蠟梅の花を晁無咎に送り、晁無咎がお礼に五言絶句を作ったが、その中に『芳菲は意浅く婆は容浅し、素児を得れば此の花の如くならんと憶う』とあった)」とあり、王直方も蠟梅を人に送って詩のやりとりをするなど、していた。その上で、任淵が注に引いたような「蠟梅は山谷が詩に詠んでから広まった」と詩話に記していたのである。[7]

賓高州は不詳。高州は現在の広東省の地名。蠟梅は唐梅(カラウメ)、十二月から二月にかけて黄色い花を咲かせる。香りが高い。花弁は蠟細工のようなツヤがある。梅の名があるが、梅とは別属で、花やつぼみから抽出した蠟梅油は薬に用いられる。

黄色い花を咲かせる蠟梅の詩になぜ「桃李」が出てくるかというと、一つには桃李の紅い花との対比であり、もう一つには桃李は「言わず、下 自ら蹊を成す」からであろう。蠟梅は桃李のような派手な姿ではないが、その香りによって、山谷らが下に集まったのである。まだ寒くて、つぼみは開かない。だから「人を悩ます」。蠟梅の「金(黄色)」のつぼみと桃李の紅い顔(花)、さらに肌で感じる「寒さ」や「香り」(嗅覚)など、五感を刺激する「風味」が満載である。

其二は、蠟梅の花が開いたあとの様子である。

体薫山麝臍、　　体は山麝臍に薫り
色染薔薇露。　　色は薔薇露に染む
披拂不満襟、　　披払すれど襟に満たず
時有暗香度。　　時に暗香の度(わた)る有り

「薔薇露」の任淵注に「楊文公談苑云、金陵宮中人、按薔薇水染生帛、一夕忘收、為濃露所漬、色倍鮮翠。按今嶺南薔薇露染衣輒黄（楊億『談苑』に「南唐の金陵の宮中の人々は、薔薇水で白絹を染めていた。ある晩、外に出したまま取り込むのを忘れて、濃い露に浸かったために鮮やかな翠色の倍ほどに色が染まった」とある。案ずるにいま嶺南では薔薇露で衣を黄色く染めている）」とある。嶺南は、現在の広東省、広西チワン族自治区、海南省の全域と湖南省・江西省の一部。詩題注にあった「竇高州家有灌叢、能香一園也」と呼応する。『談苑』は後に散佚し、いま見られる『楊文公談苑』一巻に任淵が注に引く文は見えない。宋・江少慶『事実類苑』巻四九に「（金陵）宮中人、按薔薇水染生帛、一夕忘收、為濃露所漬、色倍鮮翠」とあり、ほぼ同じ文が見える。薔薇露はローズウォーターのような香水の類と思われる。

「戯詠蠟梅二首」の時間は春初、場所は竇高州の家園、友人たちと蠟梅の香りを目当てに集まった時の作らしいと分かる。「時有暗香度」の「暗香」は任淵注にあるように林逋の「山園小梅二首」其一「暗香浮動月黄昏」を踏まえており、ほのかな香り、どこからともなく漂ってくる香りをいう。「体薫山麝臍」の強い香気と矛盾するようであるが、場所が「園」であることが共通項となっている。

黄庭堅の詩は、「文脈の断絶」があるように見えながら、深いところでイメージはつながっている。つなげているのは何かといえば、「戯詠蠟梅二首」の場合、高州（広東）という地名、園の樹の下に人々と集まっていること、この二点である。

つないでいくやり方、イメージがぽんと飛ぶさまは、たまにダジャレのような言葉遊びに似た面がある。「贛上食蓮有感（贛上に蓮を食（くら）いて感有り）」（『山谷詩集注』巻一）を見てみよう。

蓮実大如指、
分甘念母慈。
共房頭艤艤、
更深兄弟思。
実中有么荷、
拳如小児手。
令我念衆雛、
迎門索梨棗。
蓮心政自苦、
食苦何能甘。
甘飡恐腊毒、
素食則懐慙。
蓮生於泥中、
不与泥同調。
食蓮誰不甘、
知味良独少。
吾家双井塘、
十里秋風香。

蓮の実　大なること指の如し
甘きを分ちて母の慈を念う
房を共にして　頭　艤艤たり
更に深くす　兄弟を思うを
実中に么荷有り
拳　小児の手の如し
我をして念わしむ　衆雛の
門に迎えて梨棗を索むるを
蓮心　政に自ら苦し
苦きを食いて何ぞ能く甘からん
甘飡　腊毒を恐れ
素食　則ち慙じを懐く
蓮は泥中に生じて
泥と同調せず
蓮を食いて誰か甘からざらん
味を知るは良に独り少なし
吾が家　双井の塘
十里　秋風　香し

安得同袍子、　安んぞ得ん　同袍の子
帰製芙蓉裳。　帰りて芙蓉の裳を製らんことを

（通釈）蓮の実は親指ほどの大きさで、甘いのを分けて食べていると母の慈愛が思われる。ひとつの房に頭をずらりと並べた様子は、さらに兄弟を思う気持ちを深める。実の中には若芽があり、拳をにぎっている幼子の手のようだ。それは私に、子どもたちが門に迎えにきて梨や棗をせがむ姿を思い出させる。蓮の実の芯は苦い。苦いものを食べて、なぜ甘いのだろう。甘美な食事には毒がありそうで心配だが、質素な食事も恥ずかしい思いがする。蓮は泥の中で育って、泥にまみれることがない。蓮を食べれば誰でも甘いと感じるだろうが、本当の味わいを知っている人はとても少ない。私の故郷の家は双井の堤にあり、秋風に、遠くまで蓮の花の香りが漂っていた。いつか親しい仲間と共に、帰って蓮の衣裳を作れるだろうか。

「蓮実大如指」の任淵注に、「南山有台詩疏引陸機草木疏云、枸樹似白楊、有子著樹端、大如指。此借用其字。詩意謂拇指也（『詩経』小雅「南山有台」の「南山有枸、北山有楰」の疏に陸機の『毛詩草木鳥獣虫魚疏』を引いて、「枸樹は白楊に似たり、子（たね）有りて樹端に著き、大なること指の如し」という。ここはその字を借用した。詩の意は、親指を言う）」とある。枸樹は白楊に似ていて、種が指ほどの大きさだ、という『詩経』の注の「其の字を借用し」て、蓮の実の「大きさは指ぐらい」から、「大指＝親指」を連想し、房をわって実を食べていると「母の慈愛を想う」と発想が飛んでしまう。荒井氏も倉田氏も「蓮実大如指」をそのまま「蓮の実は大きさが指ほどあり（荒井）」「蓮の実の大きさは、指くらいで（倉田）」と訳しているが、「大指」が親指であること抜きでは、そのあとに

「母」へとイメージがつながっていかない。

こうして蓮の実から母親を連想したら、あとは房の中に実が並んでいるようすは「兄弟を想う」になり、芯に芽がある実の姿は「子どもの拳のようだ」となり、房をわって実をとりだして食べながら、脳裏に浮かんでくるのは故郷の家族である。

その家族を詠む際に、「子どもたちが門まできて梨や棗をせがむ姿を思い出す」という。これは陶淵明の「責子（子を責む）」に「通子垂九齢、但覓梨与栗（通子 九齢に垂（なんなん）とするに、但だ梨と栗とを覓（もとむ）るのみ）」とあるのを踏まえているが、蓮の実から、同じく食べる実として、梨と栗を連想したのだろう。しかし陶淵明のほうは「勉強もしないで梨や栗をせがむばかりで、いつまでも子どもっぽくて困ったものだ」という実際の体験、感情をうたったはずだが、これを典故として踏まえたとき、山谷の子供もそろそろ勉学に励まなければならない年（山谷自身には七歳の時に作ったという詩がある）なのか、門まできて梨や栗をせがんだことがあるのか、といったことは、もはや関係ない。「幼い子どもの小さなわがまま、それに目を細める父親」のひとつのモチーフ、様式化されたモチーフを、借りているだけであろう。

このような「文字を借用した」という注は、あちこちに散見される。典故・用例のもとの意味とは異なる使い方をしているが、イメージがそこで大きく飛躍していくジャンピングボードのような役割を果たすのである。

「贛上食蓮有感」はその詩題から、蓮に託してなにか詠いたいものがあるのだと分かるが、蓮の実を食べる行為を、房には実が並んでいて、房をわって実を取り出すと、実には芯がある、という具合に動作のまま時系列にそって描写するので、詩の中の時間も直線的に進んでいく。

蓮の実は甘い。しかし芯は苦い。相反する二つの味覚から、「甘飧」と「素食」にイメージが飛躍する。「甘飧

（甘美な食事、御馳走）」には「腊毒」がある。「腊毒」は任淵注に「国語曰、厚味実腊毒（『国語』周語下に「厚味、実は腊毒なり」とある）」を引く。『国語』を確認すると、「高位寔疾顛、厚味寔腊毒」とあり、韋昭の注に「腊は亟なり」とある。従って「甘飧」はただの御馳走ではなく、高位を意識していることが分かる。また腊毒は猛毒のこと。たとえ高位についたとしても、それは猛毒だ、の意になる。一方の「素食」は、任淵注に「伐檀詩曰、不素飧兮（『詩経』魏風「伐檀」に「素飧せず」とある）」という。功労がないのに褒めを授かる、労せずして報酬を得ること。毛伝は「素は空なり」と解釈し、陳奐の疏に「餐は猶お食のごとし」とある。

蓮の実の「甘」「苦」から高位や報酬の「甘飧」「素食」にイメージがつながり、さらに「蓮生於泥中、不与泥同調」とイメージが広がる。任淵は「維摩経曰、譬如高原陸地、不生蓮華、卑湿淤泥、乃生此華（『維摩詰所説経』巻中「仏道品第八」に「高原陸地のような場所には蓮華は生えず、卑湿淤泥なところに華が生じる」とある）」を引いて、低くじめじめした泥の中に生えて、花を咲かせる蓮の生態を説明する。黄庭堅は「贈別李次翁」（『山谷詩集注』巻一）にも「於愛欲泥、如蓮生塘（愛欲の泥に於いて、蓮の塘に生ずるが如し）」とあり、仏教の思想が背景にあるが、官界を泥中にたとえ、ひとり潔白の身を自負した屈原のことも思い起こされる。

詩の最後は、故郷の双井（洪州分寧県）に思いを馳せ、蓮池に秋風が渡るころ、「同袍子（袍を共用するほどの戦友や親しい友人）」と一緒に「芙蓉裳」を造りたいものだ、となるが、ここも「袍」と「裳」、いずれも衣服で、言葉遊び的な要素がある。また芙蓉は蓮の別名で、実から始まったこの詩は蓮の花で終わるのだが、「芙蓉裳」の任淵注は「離騒曰、製芰荷以為衣、集芙蓉以為裳（「離騒」に「芰荷を製ちて以て衣を為り、芙蓉を集めて以て裳を為る」とある）」と、屈原を引く。芰荷は菱の花で、一説に荷の花とする。

蓮の実を食べながら、時間軸にそって描写は展開し、空間的には故郷に思いを馳せ、時間的には屈原に思いを致

す構成になっている。

三、歴史上の人物を介する

人や人事への関心が高いとされる黄庭堅の詩であるが、典故・用例に歴史上の人物が登場すると、現実の人物と歴史上の人物とが二重写しになる。一つの空間に、二つの時間が平行して流れるような構成になるのである。「詠史呈徐仲車（史を詠じて徐仲車に呈す）」（『山谷詩集注』巻一）を見てみよう。

諸葛見益州、　諸葛　益州に見(まみ)え
釈耒答三顧。　耒(すき)を釈(す)てて三顧に答う
川流恨未平、　川　流るれども　恨み未だ平らかならず
武功原上路。　武功　原上の路
杜微対諸葛、　杜微　諸葛に対し
輿致但求去。　輿して致すも　但だ去るを求むるのみ
傾心倚経綸、　心を傾けて経綸に倚り
坐上漫書疏。　坐上　書疏　漫たり
白鷗渺蒹葭、　白鷗　蒹葭に渺として
霜鶻在指呼。　霜鶻　指呼に在り

借問諸葛公、　　借問す　諸葛公
如何迎主簿。　　如何ぞ主簿（しゅぼ）に迎（むか）うる

（通釈）諸葛亮は益州（劉備）と会い、鋤を棄てて三顧の礼にこたえた。いま川は流れるが恨みは尽きない、魏軍を滅ぼせなかった武功県の五丈原では。杜微は諸葛亮と面会し、輿で招かれたが固辞した。諸葛亮は誠意を尽くし、杜微の見識や徳を信頼して、その席には耳の聞こえない杜微のために書き物が散らばった。白い鷗は人里離れて葦の生える水辺にいるが、秋の鶻（たか）は呼べば聞こえるほどの近さにいる。諸葛公にお尋ねしたい、当時どのようにして杜微を主簿に迎えたのか。

詩題の任淵注に「元注曰、仲車以聵棄官。哲宗実録曰、徐積、楚州人、治平四年擢進士第。事母孝篤、郷閭化之。積字仲車、山谷同年生也」とある。元注は、任淵がもとにした『豫章黄先生文集』に元からあった注のこと。ただし四部叢刊所収・天理大学附属図書館蔵『豫章黄先生文集』ともに「仲車以聵棄官」の注はなく、「積」と注がある。任淵は内閣文庫所蔵『豫章先生文集』の系統の版本に拠っていると思われるが、この詩は欠巻のため残っていない。「聵」は耳が聞こえないこと。元注に「仲車は耳が聞こえなくなって官を辞めた」とあり、『哲宗実録』（散佚）には「徐積は楚州の人。治平四年に進士に登第した。母によく仕え孝行で、郷里の人々は彼に感化された」とある。積、字は仲車、黄庭堅と同じ年に進士に合格した、と任淵注は言う。

徐積（一〇二八～一一〇三）は楚州山陽（今の江蘇省淮安）の人。『宋史』巻四五九に伝があり、「今年過五十、以耳疾不能出仕（今年五十歳を超えるが、耳の病気のために出仕できない）」とある。この詩は同年の進士の徐積

が耳の病気のために出仕できずに故郷に帰っており、黄庭堅が神宗元豊三年（一〇八〇）初、北京教授を辞めて京師吏部に赴き、官を知吉州太和県に改められて、秋に汴京から家族三十余人を連れて任地へ赴く途中、楚州の徐積を訪ねて政事について議論した時の作である。

「杜微」が徐積を指しているとわかれば、この詩の内容は理解しやすい。任淵注は『蜀志』諸葛亮伝や先主伝（劉備の伝）、杜微伝を引いて、史実を追っていく。少し補いながらまとめると、諸葛亮は劉備に三顧の礼で迎えられ、武功県の五丈原で魏軍と戦ったが、滅ぼせなかった。杜微は益州牧劉璋に召し出されて従事となった人物で、荊州牧だった劉備が益州を支配した時、耳が聞こえないと称して門を閉ざし、出仕しなかった。入蜀して丞相となった諸葛亮が益州牧を拝領すると、徳望のある老臣を選んで迎えようとし、杜微を主簿にと願ったが断られた。そこで諸葛亮は馬車をやって杜微を招き、直接面会して頼んだ。杜微は耳が聞こえないというので、席上ではすべて紙に書き記した。誠意を尽くして説得して、杜微もついには承諾した。任淵は「仲車並聾、故以此事戯之（仲車も耳が聞こえなかったので、この故事でからかったのである）」とする。

詩の最後に、「借問諸葛公、如何迎主簿」とあって、どうすれば徐積がまた「耒を釈て」て、杜微が主簿となることを承諾したように、再び政事に参画するようになるか、諸葛公に教えてもらいたいものだ、と結ばれる。

一貫して三国時代の故事を比喩としている本詩であるが、「白鷗渺蒹葭、霜鶻在指呼」の二句が唐突で、わかりづらい[8]。

任淵注は、「白鷗渺蒹葭、霜鶻在指呼。借問諸葛公、如何迎主簿」の四句に対して、「老杜詩、白鷗没浩蕩、万里誰能馴。又詩、莫作翻雲鶻、聞呼向禽急。按通典選挙門、陳依梁制、諸州迎主簿、得未壮而仕。何遜詩、可憐双白鷗、朝夕水上遊。蒹葭字見詩」とある。杜甫の「奉贈韋左丞二十二韻」に「白鷗 浩蕩に没し、万里 誰か能く馴ら

さん」とあり、これは「白鷗」の用例。同じく杜甫の「送率府程録事還郷」に「翻雲の鶻と作る莫れ、呼を聞きて禽に向かうこと急なり」とあり、これは「霜鶻」の用例。鶻はタカのこと。『通典』巻一四「選挙門」に「陳は梁の制度に依っていて、（三十歳未満の者は出仕できなかった。ただ策試に合格した者に限って）諸州で主簿を迎えるのに、まだ三十歳に達していない者も出仕できた」とあり、これは「迎主簿」の説明。主簿は記録・文書を管轄する官。何遜の「詠白鷗兼嘲別者」（『玉台新詠』巻五）に「憐れむべし双つながらの白鷗、朝夕 水上に遊ぶ」とあり、これはまた「白鷗」の用例。『詩経』国風・秦風に「蒹葭」詩があり、これは「蒹葭」の用例。「字見～（文字は～に見える）」として言葉の用例を示すのみで内容に触れないが、『詩経』の「蒹葭」は遠くにいる友人を思う歌である。

注の対象が「白鷗」「霜鶻」「迎主簿」、また「白鷗」「蒹葭」とやや交錯していて、任淵『山谷詩集注』二十巻が政和元年（一一一一）の初稿完成から紹興二十五年（一一五五）の刊行に到るまで、幾度も手を入れ、必ずしも十分に整理されないまま世に出た経緯が分かるのだが、「白鷗渺蒹葭、霜鶻在指呼」の解釈が定まっていない感がある。

「白鷗」は、「演雅」（『山谷詩集注』巻一）にも出てくる。「演雅」は全四十句の長篇、さまざまな動植物の特徴を挙げながら人間社会を風刺する作品で、詩の最後の二句が、「江南野水碧於天、中有白鷗閑似我（江南の野水 天より碧く、中に白鷗有り 閑なること我に似たり）」である。この注に任淵は「老杜詩、飄零何所似、天地一沙鷗（杜甫の「旅夜書懐」に「飄零 何の似る所ぞ、天地 一沙の鷗」とある）」と引くだけだが、「白鷗」といえば、「奉同子瞻韻寄定国」（『山谷詩集注』巻七）の「老驥心雖在、白鷗盟已寒」の注に引く『列子』の寓話が思い起こされる。そこでは任淵は『列子』のほかに『文選』所収の江淹「雑体詩」と李白の「鳴皐歌」も引いて、「山谷詩諸多

用此意（山谷詩では多くがこの意で用いられる）」と述べている。すなわち、鷗の好きな男がいて、毎日浜辺で鷗と遊んだ。ある日、父親にその鷗を捕まえて来いと言われて、そのつもりで浜辺へ行くと、その日に限って鷗は一羽も寄って来なかった。こちらが無心ならば相手も心をゆるすが、邪心があるとすぐ先方に通じて失敗するという寓話である。野にいる白鷗は、機心を持って近づくと、寄ってはこない。逃げてしまう。

一方、タカは呼べば聞こえるほどの近さにいる。「送劉季展従軍雁門二首」其一（『山谷詩集注』巻一）に、「劉郎才力能百戦、蒼鷹下韝秋未晩（劉郎の才力 能く百戦し、蒼鷹 韝を下りて 秋 未だ晩れず）」とある。雁門に従軍する劉季展に対して、「劉君の才力は百戦にも耐えられる。鷹は鷹手貫（たかたぬき）から飛び立ち、戦いの秋はまだ終わらない」と励ます詩である。「蒼鷹」は鷹。「韝」は鷹狩りで鷹を腕にとまらせるときに用いた革製の手、たかたぬき。

野にいる白鷗のような友人よ、君はまだまだ鷹のように働けるではないか。白鷗は機心を持って近づくと逃げてしまうが、諸葛公はどうやって杜微を説得したのだろう、私もならって君を説得し、また共に働きたいのだ、という意味ではないだろうか。

この二句のように、「文脈の断絶」に見える箇所は、黄庭堅がほかの詩でどのようにその言葉を使っているか見ていくと、理解できるように思う。山谷詩を読むカギは、山谷詩の中にある。

黄庭堅は多くの文献から字句を選んで典故・用例としているが、気にいった典故・用例は繰り返し使っている。それは同じテーマを繰り返し詠んでいるからである。

『山谷詩集注』巻一から巻五までを再読していると、黄庭堅には詠みたいテーマがいくつかあることに気づく。任淵の注本は編年になっているが、巻一から巻五までは地方官だった黄庭堅が元豊元年（一〇七八）、三十四歳の時に蘇軾に寄せた詩「古詩二首上蘇子瞻」から始まり、巻一はすべて地方官時代の作品、巻二の途中から都に上っ

た後の作品になり、黄庭堅が都へ到着したのが元豊八年（一〇八五）九月、先に都へ呼び戻されていた蘇軾と元祐元年（一〇八六）年初にはじめて会い、巻五まではこの年の作品である。この時期の作品には、「古詩二首上蘇子瞻」がそうだったように、自分と同じように不遇な友人を励ます詩が多い。励まし方は、いまは不遇でもいずれ活躍する機会が巡ってくるから、一心に読書しよう、というものが多い。

荒井健氏が「文脈の断絶」の例として挙げている中に、「送王郎」（『山谷詩集注』巻一）の「江山万里頭将白（任淵注本は千里俱頭白に作る）、骨肉十年終眼青」がある。この二句について荒井氏は、「骨肉の情は、十年の歳月にも、変化を蒙むらぬ、という下句は、まず大きな屈折はみとめられないとしても、上句には甚だしい飛躍があると考えられる。「江山」と「頭将白」とに関連性は皆無である。しかもこの間にあって両者をつなぐべきことばは、当然時間をあらわすものであるべきはずのところへ、空間的距離をあらわす「万里」が用いられ、そこに生ずる飛躍と屈折を埋めるための努力が、読者に対して要求されるのである」という[9]。だが「頭は白くなっても眼は青い」という対比は、杜甫の詩を踏まえ、黄庭堅（だけでなく蘇軾も）大好きで、詩に何回も登場するのである。

しかもこれは「留王郎」（『山谷詩集注』巻一）とあわせて読むと、より理解しやすい。王郎は、王純亮、字は世弼、黄山谷の妹婿。詩題注に「王純亮、字世弼、山谷之妹婿。見於黄氏世譜」とある。『黄氏世譜』は、「謝答聞善二兄九絶句」（『山谷詩集注』巻一五）の詩題注にも見えるが、逸書か。

「留王郎」「送王郎」は、神宗元豊七年（一〇八四）、黄庭堅四十歳、監徳州徳平鎮（今の山東省商河県徳平鎮）だった時の作。前年十二月に、三年間つとめた知吉州太和県（今の江西省泰和県）の任を解かれ、分寧の家に戻り、家族を残して徳平に向かった。途中、武寧に寄り、元豊七年初、金陵を過ぎ、鍾山に王安石を訪ねる。三月、揚州を過ぎて泗州に至り、「発願文」を作る。潁昌（治所は今の河南省許昌市）で陳師道と遭い、詩を応酬し、陳師道

は山谷門下となった。汴京にしばらく逗留し、六月から七月に徳州に着く。子の相は、この年に生まれた。

留王郎（王郎を留む）

河外吹沙塵、　河外　沙塵吹き
江南水無津。　江南　水に津無し
骨肉常万里、　骨肉　常に万里
寄声何由頻。　声を寄すること何に由りてか頻りなる
我随簡書来、　我　簡書に随って来たり
顧影将一身。　影を顧みるも一身を将(ひき)いるのみ
留我左右手、　我が左右の手を留め
奉承白頭親。　白頭の親に奉承せしむ
小邦王事略、　小邦　王事　略にして
虫鳥声無人。　虫鳥　声に人無し
王甥解鞍馬、　王甥　鞍馬を解き
夜語鶏喚晨。　夜語りて　鶏　晨を喚ぶ
母慈家人肥、　母は慈しみて家人肥え
女恵男垂紳。　女は恵(さと)くして男は紳を垂る
有田為酒事、　田有りて　酒事を為し

豚韮及秋春。
生涯得如此、
旧学更光新。
索去何草草、
小留慰艱勤。
百年才一炊、
六籍経幾秦。
要知胸中有、
不与迹同陳。
郢人懐妙質、
聊欲運吾斤。

豚韮　秋春に及ぶ
生涯　此くの如きを得れば
旧学　更に光新たなり
去らんことを索めて何ぞ草草たる
小（しば）らく留まりて艱勤を慰めよ
百年　才（わず）かに一炊
六籍　幾秦をか経たる
知るを要（もと）む　胸中の
迹と同に陳びざる有るを
郢人（えいひと）　妙質を懐く
聊か吾が斤を運（めぐ）らさんと欲す

（通釈）ここ黄河の北では砂塵が吹くが、故郷の江南は豊かな水が果てしなく広がっている。肉親はいつも万里のかなたに離れていて、手紙を送りたいが頻繁にはできない。私は命令書によってここに赴任してきたのだが、随っているのは影ばかり。私の左右の手（兄弟）は故郷にとどめて、年老いた親に仕えさせている。小さな町では政務も忙しくなく、虫や鳥の声ばかりで人々の声も聞こえない。王くんは旅の馬から下りられ、夜通し語り合い、鶏が夜明けを告げるときになった。母は慈愛深く、家のものは元気で、娘は賢く、息子は大帯をしめるまでになったとのこと。田があるのでその穀物で酒を造り、先祖のお祭りに当たっては春には韮を、秋

には豚をお供えしているそうだ。生涯このように過ごしていれば、むかし学んだ学問はいっそう輝きを新たにするだろう。君はどうしてそんなに慌てていとまごいをなさるのか。まあもう少し留まって、私の苦労を慰めてください。人生百年の栄華もわずかに黄粱一炊の夢。経典でさえ秦の焚書に限らず幾たびも途絶えそうな目に遭ってきた。だが知ってください、胸の中の学問は、書物の跡とともに古びることはないと。郢人（王くん）はすばらしい素質をお持ちだから、匠石（私）もいささか斧（詩作の腕）をふるってみたい。

送王郎（王郎を送る）

酌君以蒲城桑落之酒、
泛君以湘纍秋菊之英。
贈君以黟川点漆之墨、
送君以陽関墮涙之声。
酒澆胸次之磊隗、
菊制短世之頽齢。
墨以伝万古文章之印、
歌以写一家兄弟之情。
江山千里俱頭白、
骨肉十年終眼青。
連床夜語鶏戒暁、

君に酌むに蒲城桑落の酒を以てし
君と泛ぶるに湘累秋菊の英（はな）を以てす
君に贈るに黟川点漆の墨を以てし
君を送るに陽関墮涙の声を以てす
酒は胸次の磊隗たるを澆（そそ）ぎ
菊は短世の頽齢を制（とど）めん
墨は以て万古文章の印を伝え
歌は以て一家兄弟の情を写（のぞ）かん
江山千里　俱に頭は白くなるとも
骨肉十年　終に眼は青し
連床　夜語して　鶏　暁を戒（つつ）むも

書囊無底談未了。
有功翰墨乃如此、
何恨遠別音書少。
炊沙作糜終不飽、
鏤氷文章費工巧。
要須心地收汗馬、
孔孟行世日杲杲。
有弟有弟力持家、
婦能養姑供珍鮭。
児大詩書女糸麻、
公但読書煮春茶。

書囊　底無く　談じて未だ了(おわ)らず
翰墨に功有ること乃ち此の如し
何ぞ恨まん　遠別して音書少(まれ)なるを
沙を炊いて糜を作らば終に飽かず
氷に文章を鏤(ちりば)むるは工巧を費やさん
心地に汗馬を収めんことを要須(ようしゅ)せば
孔孟　世に行われて日に杲杲たらん
弟有り弟有り　力めて家を持し
婦は能く姑を養い珍鮭を供す
児は大なりて詩書　女は糸麻
公は但だ書を読み春茶を煮よ

（通釈）君と蒲城の桑落の酒を酌み交わし、君と屈原が食したという秋菊の花を浮かべよう。君に黟川の漆の如き墨を贈り、君を陽関の涙が堕ちる曲で送ろう。酒は胸のうちにたまったものを洗い流し、菊は短い命が衰えることをとどめるだろう。墨はふたりの暗黙の思いを長く文章で伝え、歌は一家兄弟の憂いの情をはらすだろう。江山千里も離れてともに髪は白くなったが、肉親は十年離れていても心が結ばれていた。寝台を並べて夜通し語り、鶏が暁を告げた。話題にする書物は限りなく、話はいつまでも終わらない。あなたの学問の功績がすばらしいと分かったから、遠く離れて音信が少なかったことを恨みはしない。砂を炒って粥を作っても結

局は腹いっぱいにならないし、氷に文章を刻むのは無駄骨である。心に汗馬を収めようと努力してこそ、孔子孟子の道は世に行われて日に輝くのだろう。弟がいる、弟がいる。家をよく守っている。その妻はよく母の世話をし、山海の珍味を膳にのせる。男児は生長して学問をし、女児は裁縫をする。あなたは悠々と書物を読み、春の新茶を飲んで過ごされよ。

「送王郎」の「江山千里俱頭白、骨肉十年終眼青」は、「留王郎」の「河外吹沙塵、江南水無津。骨肉常万里、寄声何由頻」「我随簡書来、顧影将一身。留我左右手、奉承白頭親」を承けての表現である。「骨肉（家族）」のいる故郷の水豊かな江南の「江山」と、任地の沙塵舞う北方河外の地は、空間的に「千里」も「万里」も離れている。手紙を寄せるのも容易ではない距離を、自分は「簡書（天子の命令書）」でやってきた。「影」だけを「一身」に連れて、故郷に「左右手（兄弟、ここは妹婿の王純亮をいう）」を残し、「白頭」の「親」の世話を頼んで。そこへ王くんが訪ねてきた。故郷の家族の様子を聞くに、貧しいながらもきちんと先祖を祭り、親に孝行を尽くし、子らを育てている。

黄庭堅と王純亮は学友だったようで、「読書（学問に励む）」についても多く語られる。「留王郎」の最後の二句「郢人懐妙質、聊欲運吾斤」は、黄庭堅が好んで使う典故で、『荘子』徐無鬼篇に見える故事である。

荘子過恵子之墓、謂従者曰、郢人堊漫其鼻端、若蠅翼、使匠石斲之。匠石運斤成風、聽而斲之、尽堊而鼻不傷。郢人立不失容。宋元君聞之、召匠石曰、嘗試為我為之。匠石曰、臣則嘗能斲之。雖然、臣之質死久矣、自夫子之死也、吾無以為質矣。

荘子が恵子の墓を過った時、従者を顧みて言った。「左官が白い壁土を蝿の羽ほどの薄さで鼻のさきに塗り、大工の名人匠石にこれを削らせた。匠石は斤をすばやくビューっと振るい、左官はやるにまかせた。壁土はすっかり削り落とされたが鼻にはかすり傷ひとつ無かった。左官もじっと立ったまま顔色一つ変えなかった。この話を宋の元君が聞き、匠石を呼んで『ひとつ私のためにもう一度その芸をやってくれ』といった。すると匠石は『私は以前これをうまく削ることができました。しかし、私が芸をやることのできた相棒は死んでもうかなりになります（もう腕を振るうことはかないません）』と言った。（私にしても同じことだ。）恵施先生がお亡くなりになってから、私の好敵手になってくれる者がいなくなってしまった。（だから議論の妙を尽くす事ができない。）」

「汗馬（汗血馬）」のように何年も「読書」する、年をとって「倶に頭白」になっても、「終に青眼」で。同じように学問に励む相手がいる。たとえいま不遇であろうとも、気に病む必要はない。これは「古詩二首上蘇子瞻」にも出てきたテーマである。この文脈の中で「江山千里倶頭白、骨肉十年終眼青」を読むと、さほど唐突な感じはしない。

「留王郎」の「六籍経幾秦」も少し分かりづらいが、任淵注に「王介甫虔州学記曰、周道微、不幸而有秦、焼詩書、殺学士。然是心非独秦也、当孔子時、既有欲毀鄉校者矣。介甫又有桃源行曰、天下紛紛経幾秦（王安石、字は介甫の「虔州学記」に「周の道が衰微したのは不幸であった。秦が詩書を焼き、学者を殺したいわゆる焚書坑儒があった。しかし、このような心性はただ秦だけのものではない。孔子の時にも、既に鄉校を破壊しようという動きがあったのである」とある。介甫はまた「桃源行」で、「天下紛紛として幾つの秦を経たる」という）」とある。黄

庭堅は「晁張和答覯覯五言予亦次韻」（『山谷詩集注』巻六）にも、「自古非一秦、六籍蓋多難（古より一秦に非ず、六籍 蓋し難多し）」と、儒学を修める困難を詠っている。

四、山谷詩の時空――詞と比べて

黄庭堅の詩をいくつか読みながら、時間と空間がどう設定されているのか見てきた。黄庭堅の場合は、自然や事物を描写しているようでいて、実は人や人事について語っていることが多いので、時間・空間とあわせて人物を追っていくと、「詩路」を見失うことがないように思う。典故がふんだんに使われ、用例が幅広い分野に及ぶので、典故・用例に登場する人物や場所によって、詩中の時間や空間も過去や他所に移動する。移動することによって、詩は時間的に、あるいは空間的に、重層的な意味を持ちながら展開していく。これは典故や用例を用いる詩のほとんどに言えることで、この効果を狙って典故・用例が用いられるわけである。

しかし任淵の注などによって、字句の裏にどのような典故・用例があるのか分かれば、また黄庭堅がほかの作品でどのようにその言葉を使っているのが分かれば、「文脈の断絶」に見える詩のみちすじ、「詩路」が見えてくる。

それは、これまで見てきた作品から分かるように、黄庭堅の詩の場合、時間軸があまり揺れず、基本的に時間の流れは過去から現在（語り手の）に向かって直線的に進んでいるからではないかと思われる。「古詩二首上蘇子瞻」の梅の実しかり、「贛上食蓮有感」の蓮の実を食べる動作も然り。「詠史呈徐仲車」の描写も、歴史上の出来事の時間の流れにそって叙述されていた。

これが山谷詩の特徴であることを明らかにするために、黄庭堅と活動の時期がほぼ重なる周邦彦（一〇五六～一

一二一、字は美成）の詞の構成と比べてみる。黄庭堅は旧法党、周邦彦は新法党と見なされ、政治的には活躍した時期が互い違いになるが、典故を好んで使ったとは周邦彦の詞についても評されることで、張炎『詞源』下巻「雑論」に「美成詞只当看他渾成処。於軟媚中有気魄、採唐詩融化如自己者、乃其所長（美成詞は只だ当に他の渾成する処を見るべし。軟媚の中に於いて気魄有り、唐詩を採りて融化すること自己の如き者は、乃ち其の長ずる所なり）」とある。[10]

詞では同じメロディを複数回歌うことがあり、よくある双調（二回繰り返す）の場合、前段が叙景、後段が叙情という構成になっていることが多い。また「領字」と呼ばれる手法があり、「念…」「想…」などを契機に、詞中の時間や空間が大きく展開する。

周邦彦の詞の中から、小序に「詠梅（梅を詠む）」とある「花犯」を見てみよう。

粉牆低、梅花照眼、依然旧風味。
　粉牆低く　梅花　眼を照らし　依然として旧風味
露痕軽綴。
　露痕　軽く綴る
疑浄洗鉛華、無限佳麗。
　疑うらくは鉛華を浄洗せし　無限の佳麗かと
去年勝賞曾孤倚、氷盤共燕喜。
　去年の勝賞　曾て孤（ひと）り倚り　氷盤　燕喜を共にす

更可惜・雪中高士、香篝熏素被。
　更に惜しむべし　雪中の高士　香篝に素被を熏ずるを

今年対花最匆匆、相逢似有恨、依依愁悴。
　今年　花に対し　最も匆匆たり　相い逢うは限り有るに似て　依依として愁悴す

吟望久、青苔上、旋看飛墜。
　吟望すること久し　青苔の上　旋(たちま)ち飛び墜つるを看る

相将見・脆円薦酒、人正在、空江煙浪裏。
　相い将いて　脆円　酒に薦むるを見るに　人は正に空江煙浪の裏(うち)に在り

但夢想・一枝瀟灑、黄昏斜照水。
　但だ夢想す　一枝の瀟灑　黄昏　斜めに水を照らすを

（通釈）白い壁が低く、梅の花がまぶしい。昔のままの風情。露のあとが軽く残り、おしろいを洗った、たくさんの美女のよう。去年、このすばらしい風景をひとりで楽しんだ。氷盆に置かれた梅の枝と、ともに宴飲した。惜しむべし、その姿は雪中に門を閉ざして横になっていた古(いにしえ)の高士のように、ひっそりと雪をかぶって香りを放っていた。

　今年、あわただしく花を目の前にする。逢瀬は限り有るに似て、いつまでも愁い疲れる。しばらく吟詠しながら見ていると、コケの上にさっと花が散り落ちた。丸くなった青い実を酒のアテにする季節がやってくる頃、

私は渺茫とした江湖にいて、ただ夢の中で思うのだろう、瀟洒な梅の一枝が、水面にのび、夕陽が斜めにさしかかるのを。

時間は、「粉牆低、梅花照眼、依然旧風味。露痕軽綴。疑浄洗鉛華、無限佳麗」は現在。「去年…」と明示されて、「去年勝賞曾孤倚、氷盤共燕喜。更可惜・雪中高士、香篝熏素被」は過去。後段の冒頭「今年…」と明示されて、また現在へ戻る。「今年対花」が語り手の現在の時間である。梅の花が咲いている時節で、思い出の中の梅も、まだ雪の降る頃に咲いた花を愛でたのである。「氷盤」とあるが、黄庭堅の「古詩二首上蘇子瞻」其一にもあったように、本来は夏に梅の実を盛って味わうのであるが、前段では季節は冬末春初、花をつけた枝を盛っている。それがこの詞の妙所でもある。

後段の季節は、春の終わりである。花はあわただしく散り、青い苔の上に点々と落ちる。苔の青さは梅の実の青さへとイメージがつながり、「相将見・脆円薦酒」は氷盤に梅の実を盛る頃、未来へと時間が飛ぶ。そのころ自分は、ここにはもういない。きっと夢の中で今日のこの光景を思い出すのだろう。

一方で黄庭堅の詞は、慢詞（長篇）であっても、時間の流れは一定で、直線的に進んでいく。小序に「茶」とある「満庭芳」を見てみよう。

北苑春風、方圭円璧、万里名動京関。
　北苑の春風　方圭と円璧と　万里　名は京関を動かす
碎身粉骨、功合上凌煙。

身を碎き骨を粉にして　功は合に凌煙に上るべし
尊俎風流戦勝、降春睡、開拓愁辺。
尊俎の風流　戦いて勝ち　春睡を降し　愁辺を開拓す
纖纖捧、研膏濺乳、金縷鷓鴣斑。
纖纖として捧げば　研膏　乳を濺ぐがごとく　金縷　鷓鴣の斑

相如雖病渇、一觴一詠、賓有群賢。
相如　渇を病むと雖も　一觴に一詠し　賓に群賢有り
為扶起灯前、酔玉頽山。
為に灯前に扶起せよ　酔える玉の山を頽(くず)せるを
捜撹心中万巻、還傾動・三峠詞源。
心中の万巻を捜撹すれば　還た傾動す　三峠の詞源を
帰来晩、文君未寝、相対小窓前。
帰来すること晩(おそ)けれど　文君は未だ寝ずして　相い対す　小窓の前

（通釈）北苑の春風は、四角や丸い形に固められて、万里のかなた、都までその名を轟かせている。身を砕き骨を粉にして、その功績はまさに凌煙閣（功臣の肖像画を置く楼閣）に挙げるべきである。粋であることは酒にも勝り、飲めば春の眠気も去り、愁いも開かれる。そっと奉げ持ち、乳のような白く泡だつ「研膏（茶の

名）」をそそげば、金縷のように輝き、鷓鴣のような斑模様が茶器に浮かぶ。
司馬相如は消渇の病を患っていたが、酒を一杯飲むと詩を一つ詠み、諸賢が客となった。どうか茶よ、灯前に助け起こしておくれ、酔いつぶれた私を。そうすれば心中の万巻の書物をかき回して、三峡の急流をひっくり返すほどの構想を出してみせよう。遅く帰宅してみると、文君（妻）はまだ眠らずに、小窓の前で待っていてくれた。

「北苑」は宮廷への貢茶を作る茶園で、建州（今の福建省健甌県東）にある。黄庭堅の「謝送碾壑源揀牙」（『山谷詩集注』巻二）に「裔雲従龍小蒼璧、元豊至今人未識（裔雲 龍に従う 小蒼璧、元豊より今に至るも人いまだ識らず）」とあり、神宗の熙寧年間（一〇六八～一〇七七）末、聖旨が建州に下され、貢茶の製造が始まった。黄庭堅は出身地の双井の茶のこともたびたび詩に詠み、また北宋当時の風潮もあって、茶の贈答をしたり、それにまつわる詩の制作が盛んだった。「謝送碾壑源揀牙」は元豊八年（一〇八五）九月頃の作であるが、都へ上って、都の人士との交流が生まれ、貢茶（臣下に下賜される。この時は神宗の裕陵ができたので百官に下賜された）を贈られ、詠んだものである。「満庭芳」詞もこの時期の作であろう。

「満庭芳」にも典故・用例がたくさんあるが、北苑の茶（四角や円形に固めてある団茶）を粉に挽き、煮る。茶器に注ぐと、表面には乳色の泡が立ち、金色に輝き、細かいつぶつぶした泡は鷓鴣の斑模様のようである。それを飲むと酒の酔いも醒め、しゃっきりして司馬相如のように（相如は酒で酔った時だが）詩句が浮かびそうだ。帰宅すると卓文君（司馬相如の妻）のように、自分の妻は帰りを待っていた。団茶を石臼で挽いて粉にする（「謝送碾壑源揀牙」の「碾」は石臼で挽くこと）ところから始まって、飲んで気分も爽やかになり帰宅するところまで、時

系列にそって描写されるのである。

黄庭堅の「詩路」は、時間の流れに沿っている。

おわりに

黄庭堅の詩は典故・用例が多く、任淵の注も膨大なので、注に従って読むだけでもたいへんな作業であり、細かい典故・用例にひとつひとつ当たっていくうちに、結局のところ何を言わんとしている詩なのか、分からなくなってくる。

荒井健氏は『黄庭堅』「解説」で、「かれの詩において、人の意表に出る断絶が愛用されていることは、今まで縷説してきたとおりで、……論理的な関連が欠けていることは事実であり、知的な考究のみでは、ほとんど解決は不能に近い」という。しかし「読者のひとりひとりにとって、恐らく無数の受容が可能であろう」というほどには、黄庭堅の詩は解釈の自由を許すものではないように思われる。倉田淳之助氏も「その博識と鍛錬は賞賛されながら、一方では難解の評を生み、時には晦渋となって幾つもの解釈が生ずることになる」と評していたが、むしろ敷き詰められた典故・用例によって、ほかの解釈を許さない、堅固に構築された詩的世界であるように思われる。

しっかりと織り固められた「蜀の錦」のような黄庭堅の詩を読み解くには、典故・用例についてきちんと押さえた上で、織り上げられた錦を俯瞰し、織り目や模様の流れを追っていく、典故・用例に囚われるのではなく、いわゆる「換骨奪胎」「点鉄成金」した後の字句を、時間・空間、そして人物を中心に時系列にそって追っていくと、詩的論理のみちすじ、本稿で言うところの「詩路」を見失わないのではないかと思う。

注

（1）荒井健注『黄庭堅』、中国詩人選集二集7、一九六三年、岩波書店。
（2）倉田淳之助注『黄庭堅』、漢詩大系18、一九六七年、のち漢詩選12、一九九七年、集英社。
（3）拙論「黄庭堅の詩を学ぶ――姜夔」、『風絮』十三号、日本詞曲学会、二〇一六年、一～二七頁。
（4）黄庭堅は若い頃、家が貧しく父親も早くに亡くなったので、薬屋でもやろうか、と考えていたという。吉川幸次郎「詩人と薬屋――黄庭堅について」（『吉川幸次郎全集』第13巻、筑摩書房、一九六九年、所収）、参照。
（5）倉田淳之助注『黄庭堅』「解説」、三一頁。
（6）吉川幸次郎『宋詩概説』、『中国詩人選集』二集1、岩波書店、一九六二年。のち岩波文庫、二〇〇六年。引用は文庫版、二〇二頁より。
（7）黄庭堅が王直方に宛てた手紙「致立之承奉書」（台北故宮博物院蔵）に、「欲為素児録数十篇妙曲作楽、尚未就爾（素児のために数十篇のよい楽曲を書いてあげたいが、まだできておりません）」とある。「致立之承奉書」は、『黄庭堅尺牘名品』、上海書画出版社、二〇一二年、所収。この手紙と王直方との交流については、拙論「『山谷詩集注』を読むために」、慶應義塾大学日吉紀要『言語・文化・コミュニケーション』四八号、二〇一六年、六三～八九頁、でも紹介した。また任淵の詩題注に引く「山谷書（黄庭堅の手紙）」は、もとは他の蠟梅の詩に付されていたらしい。あわせて拙論、参照のこと。
（8）倉田氏は「白鷗は遠く波間のよしやあしに人から離れているが、杜微はそのように世のわずらわしさから遠ざかっていた。鷹は猛禽ながら飼われる鳥を取るに使われる。かりに尋ねるが、孔明は何として杜微を主簿に迎えようとしたのであろうか。徐積が隠居しているのはよいことであるが、孔明のようなすぐれた人が居れば、績を用いるであろうに」と訳しているが、よく理解できない。
（9）荒井健注『黄庭堅』「解説」、八～九頁。
（10）詞学研究会編著『宋代の詞論――張炎『詞源』――』、二〇〇四年、中国書店、二四〇～二四二頁、参照。